

書評

Mark Schroeder,
Slaves of the Passions.
Oxford University Press, 2007.

角谷直紀

1. はじめに

本書のタイトルは、「理性は、情念の奴隷であり、そして、そうであるべきだ」という人間本性論の有名な一節に由来する。このような見解は、道徳性の客観的な規範性を脅かすものと見なされ、近年のメタ倫理学において、集中的な批判にさらされてきた。本書は、それらの批判に対して、行為の理由に関する、ある「ヒューム主義的」な——必ずしも、ヒューム自身のものではない——見解を擁護することを試みたものである。その見解とは、「すべての行為の理由は、究極的には、欲求によって説明される」というものだ。以下では、本書の構成に沿って、各章の内容を簡単に紹介する。最後の章は、紙数の関係で省略する。

2. 理由に関するヒューム主義者の理論

第1章で、まず、具体的な例と共に、理由に関するヒューム主義者の理論（HTR : Humean Theory of Reasons）の説明が与えられる。その例とは、次のようなものだ。招待されたパーティーでダンスがあるという事実は、ダンスが好きなロニーにとっては、パーティーに参加するための理由であり、ダンスが嫌いなブラッドリーにとっては、パーティーに参加しないための理由である。HTR* によれば、すべての理由は、行為者の心理の現実の特徴によって、この事例と同じ仕方の説明される。HTR* には、この特徴の違いと、その説明の仕方の違いに応じて、さまざまなバージョンがありうるとされる。著者が擁護する見解は、そのうちの、「仮言命法主義（Hypotheticalism）」と呼ばれるバージョンである。著者によれば、この見解は、HTR* に対する多くの異論に耐性を持ち、さまざまな具体例に最善の説明を与える。ここで、著者は、ロニーとブラッドリーの違いを究極的に説明する心理状態を（それが何であれ）「欲求」と呼び、このバージョンを「HTR」と呼ぶことを取り決める。なお、HTR* は、行為者の心理状態を限定しないバージョンであり、HTR は、

それを欲求に限定するバージョンである。

仮言命法主義の詳細な説明に移る前に、著者は、予備的な議論として、「理由」という語の用法を整理する。著者によれば、「理由」という語の意味は、説明上の意味、客観的で規範的な意味、主観的で規範的な意味の三つに分けられる。以後、客観的で規範的な意味での理由を「客観的な理由」、主観的で規範的な意味での理由を「主観的な理由」と略記する。説明上の理由は、単に何かは事実である（必ずしも原因ではない）非規範的な理由である。たとえば、円であるものがすべての点を中心から等しい距離に持つことは、中心から他の点よりも遠い距離にあるいくつかの点を持つような円が存在しない理由である。客観的で規範的な理由は、事物が行為者の信念と独立に現実にもそうである仕方に依存する理由である。たとえば、仮に、ロニーとブラッドリーがパーティーでダンスがあることに気づかないとしても、パーティーでダンスがあるという事実は、依然として、ダンスが好きなロニーにとってのパーティーに行くための理由であり、ダンスが嫌いなブラッドリーにとってのパーティーに行かないための理由である。主観的な理由は、事物が現実にもそうである仕方と独立に行為者の信念に依存する理由である。たとえば、自分のグラスにジンとトニックが入っていると信じていることは、事実がどうであれ、バーニーにとっての少しづつ飲むための理由である。ここで、主観的な理由のサブカテゴリーとして、動機づける理由が挙げられる。動機づける理由についての主張は、主観的で規範的な理由と説明上の理由の両方についての主張と見なされる。そして、主観的な理由は、客観的な理由の用語で理解される。具体的には、それらは、それぞれ、次のように定義される。

Motivating R が、X がそのために A した（動機づける）理由であることは、R は X にとっての A するための主観的で規範的な理由だったという事実が、X が A した説明上の理由を構成することだ。

Subjective R が X にとっての A するための主観的な理由であることは、X が R を信じていて、かつ、R が、もし真であるならば、X にとっての A するための客観的な理由であるような種類の事物であることだ。

もし、Motivating と Subjective の両方が真であるならば、純粹に説明上の文脈を除くすべてに関連する「理由」という語の根本的な意味は、客観的で規範的な意味であることになる。HTR は、この意味での理由を、欲求によって説明するとされる。

著者は、ここで、さらに、客観的で規範的な理由を、行為者関係的な理由と行為者中立的な理由の二つに分ける。行為者関係的な理由は、X を行為者、A を行為、R を理由と

して、「R は X にとっての A するための理由である」「X にとっての A するための理由 R が存在する」のように、三項関係によって表現される。たとえば、「パーティーでダンスがあることはロニーにとってのパーティーに行くための理由である」「パーティーに行くためのロニーにとっての理由が存在する」のように。行為者中立的な理由は、A を行為、R を理由として、「R は A するための理由である」「A するための理由 R が存在する」のように、二項関係によって表現される。たとえば、「キャシーが助けを必要とするという事実が、キャシーを助けるための理由である」「キャシーを助けるための理由が存在する」のように。著者は、この二つの関係の關係に関する、多くの異なる見解のすべてに反対して、次のように述べる。基本的な客観的で規範的な理由關係は三項を持つ。そして、行為者中立的な關係は、行為者關係的な關係の行為者の項の普遍量化として分析されるべきだ。つまり、行為者中立的な理由は、次のように定義される。

Agent-Neutral R が A するための理由であることは、R が（われわれの）すべてにとっての A するための行為者關係的な理由であることだ。「われわれ」の範圍は、文脈的に決定される。それは、すべての可能な行為者を含むかもしれない。

その上で、著者は、道徳的な文脈では、すべての人が「われわれ」の一人と見なされることは明らかであると主張する。つまり、もし、R が X するための道徳的な理由であるならば、それは、すべての人にとっての X するための理由である。

最後に、著者は、理由でありうる種類の事物の候補を考察する。著者によれば、それは、事実と真である命題のどちらかでなければならない。なぜならば、何かは誰かにとっての何かをするための理由として引用されうるすべての事例において、同程度にうまく引用されうる何らかの事実、あるいは真である命題が存在し、かつ、他にそのようなものは存在しないからだ。そのどちらでもないもの（たとえば、ある人のある欲求）が理由として挙げられる場合には、それは、事実、あるいは真である命題（たとえば、その人がその欲求を持つという事実）として再解釈される。

3. 背景条件は存在しないという見解と標準モデル理論

第2章から第4章にかけて、理由の違いを説明する仕方に関する一般的な高水準の理論と、それらの理論から導かれるHTRに対する異論が考察される。

第2章で最初に取り上げられる見解は、背景条件は存在しない（NBC : No Background Conditions）というものだ。NBC見解は、理由と背景条件を区別しない。つまり、理由であ

る事物と、それが理由である理由を説明するために必要な事実を区別しない。なお、このように「理由である理由」と言うとき、基本的には、前者の「理由」は客観的で規範的な理由であり、後者の「理由」は説明上の非規範的な理由である。著者は、この見解に反対して、理由と背景条件を区別するべきだと主張する。というのは、NBCを採用すると、HTRが実践的推論を反対すべき利己的行為（OSR：Objectively Self-Regarding）にするという異論の洗練されたバージョンと、ある種類の理由を適切でない場所に位置づけるという異論（WPO：Wrong Place Objection）を回避することが難しくなるからだ。ここでは、まず、具体的な例を挙げて、著者の見解とNBC見解の違いを説明する。それから、OSRとWPOを紹介する。

著者の見解とNBC見解の違いは、理由が欲求によって説明される仕方に関わるものだ。たとえば、今夜のパーティーでダンスがあり、ロニーはダンスすることを欲求すると想定しよう。著者の見解によれば、このとき、欲求は理由の部分ではなく、理由の背景条件の部分である。この見解によれば、この事例は次のように解釈される。パーティーでダンスがあるという事実は、ロニーにとってのそこへ行くための理由である。なぜならば、彼はダンスすることを欲求するからだ。ロニーがダンスすることを欲求することは、パーティーでダンスがあるという事実が彼にとってそこへ行くための理由である理由の部分である。これに対して、NBC見解によれば、欲求は理由の部分であり、また、そうでしかありえない。この見解によれば、この事例は次のように解釈される。ロニーがダンスすることを欲求するという事実は、ロニーにとってのパーティーへ行くための理由の部分である。

OSRとは、次のような異論である。もし、NBCとHTRの両方が真であるならば、ある事実がある人にとっての理由であるためには、その人が他人を助けるべきかどうかを考えている場合でさえ、その人自身が理由の部分として言及される必要がある。さらに、ここで、熟慮の制限（DC：Deliberative Constraint）という自然な仮定を置くと、人は、自分が他人を助けるべきかどうかを考えている場合でさえ、自分自身の欲求について考えていなければならないということが帰結する。DCとは、ある人がうまく推論するとき、その人は、自分自身の推論について考えているべきだ、という仮定である。著者によれば、トマス・ネーゲルは、この三つの仮定によって、HTRに対してOSRを提起した。なお、OSRの最も洗練されたバージョンは、NBCを前提する。なお、OSRには、NBCを前提しない粗野なバージョンもあり、それは、自己利益理論と呼ばれる。それによれば、すべての理由は自己利益の欲求によって説明されるべきである。仮言命法主義は、HTRの大多数のバージョンと同様に、理由は、自己の利益によって説明される必要はあるが、自己の中の利益によって説明される必要はない、ということ認める。結局、著者の診断はこうだ。HTR、NBC、

DCのうち、ネーゲルによって提起されたOSRを回避するために否定されるべき仮定は、NBCである。なぜならば、そうすることによって、直観的なデータをうまく扱うことができるからだ。仮言命法主義によって、次のような説明が与えられる。X（たとえば、ロニー）にとってのA（たとえば、パーティーに参加）するための客観的で規範的な理由は、P（たとえば、ダンスすること）がXの一つの欲求の対象であるとき、XのAすることがPを促進する理由を説明するために役立つ事物である。RがXのAすることがPを促進する理由を説明するために役立つという事実は、理由の部分ではない。Rのみが理由であり、それは、Xに言及することを全く必要としない。Xは、X自身とX自身の欲求について考えることなく、自分の理由のすべてを考慮に入れることができる。Xは、Pについて考えるだけでよい。ここで、理由が次のように定義される。

Reason すべての命題 r 、行為者 x 、行為 a について、もし、 r が x にとっての a するための理由であるならば、それは、次のような、ある p が存在することによる。その p とは、 x がその対象を p とする欲求を持ち、かつ、 r が真であることが、 x の a することが p を促進する理由を説明するものの部分である、そのようなものだ。

WPOに対する答えも、基本的には同じである。WPOとは、次のような異論である。もし、HTRとNBCの両方が真であるならば、たとえば、われわれが、「キャシーが助けを必要とするという事実が、リャンにとってのキャシーを助けるための理由である」と言う場合でさえ、リャンの欲求は、リャンにとってのキャシーを助けるための理由の部分でなければならない。しかし、直観的に、これは偽である。リャンの欲求が何であれ、HTRは、リャンの理由を適切でない場所に位置づける。仮言命法主義は、これが直観に反する帰結であることを認めた上で、次のように答える。リャンの欲求は、リャンにとってのキャシーを助けるための客観的で規範的な理由の部分ではなく、その背景条件、すなわち説明上の理由の部分である。つまり、否定されるべき前提はNBCであってHTRではない。

第3章で、規範的説明の標準モデル理論が取り上げられ、そこから導かれる、不整合（Incoherence）と排外主義（Chauvinism）という二つの異論が考察される。標準モデル理論（SMT : Standard Model Theory）によれば、「 p であるから x にとっての a するための理由が存在する」という説明は、次のような仕方で機能しなければならない。(1) x にとっての b するための理由が前もって存在するような、ある行為 b が存在することによる。(2) 単に p によらない。(3) p は、 a することが x にとっての b するための手段である理由を説明する。たとえば、「ロニーがダンスすることを欲求するからロニーにと

ってのパーティーに行くための理由が存在する」と言うとき、SMTによれば、ロニーがダンスすることを欲求するという事実は、パーティーに行くことが次のような行為を遂行するためのロニーにとっての手段である理由を説明している。その行為とは、ロニーにとってのそうするための理由が前もって存在するような行為である。ここで、前もって存在する理由の候補として、自分自身の欲求を追い求めるための理由が挙げられる。たとえば、もし、ロニーがダンスすることを欲求するならば、ダンスしに行くことはロニーにとっての彼の欲求を追い求めるための方法であり、したがって、ロニーにとってのダンスしに行くための理由が存在する。そして、もし、パーティーでダンスがあるならば、パーティーに行くことはロニーにとってのダンスしに行くための手段であり、したがって、ロニーにとってのパーティーに行くための理由が存在する。だから、SMTによれば、欲求によるロニーの理由の説明は、さらなる理由——ロニーにとっての、彼の欲求を追い求めるための理由に言及する必要がある。しかし、この結論はHTRにとって破壊的である。なぜならば、そうすると、HTRに対する不整合の異論が生じるからだ。HTRによれば、すべての理由は、ロニーの理由と同じ仕方で欲求によって説明されなければならない。SMTによれば、ロニーにとっての彼の欲求を追い求めるための理由は、欲求による理由の説明が機能するために必要である。この理由がロニーの理由と同じ仕方で説明されるためには、それ自体によって説明されなければならない。しかし、それ自体を説明しうる理由は存在しない。このように、SMTから、HTRは、この理由が欲求によって説明されうることと、それはありえないことの両方にコミットしていることが帰結する。したがって、もし、SMTが真であるならば、HTRは文字通りに不整合である。ここで、HTRを、「一つの理由を除いて、すべての理由は同じ仕方で説明されなければならない」と修正することによって、不整合を回避することは可能である。その一つとは、ある人にとってのその人自身の欲求を追い求めるための理由である。しかし、そうすると、今度は、HTRに対する排外主義の異論が生じる。なぜならば、欲求を追い求めるための理由だけが、欲求によって説明されないただ一つの理由であると見なす根拠は何もないからだ。したがって、もし、SMTが真であるならば、HTRは不整合と排外主義のどちらかである。

著者は、ここで、否定されるべき前提はSMTであると主張する。なぜならば、SMTはあまりにも強すぎるからだ。著者は、二つの例を挙げる。第一に、もし、SMTが真であるならば、それは、HTRだけでなく、「すべての命題 r 、行為者 x 、行為 a について、もし、 r が x にとっての a するための理由であるならば、 r であるから、 x と a は関係 R に立つ」という形式を持つ他のすべての完全に一般的な理由についての説明上の理論が不整合であることを示す。第二に、SMTは、行為者関係的な理由は存在するが行為者中立的な

理由は存在しないという可能性について奇妙な帰結をもたらす。SMTによれば、複数の行為者の理由のすべての違いは究極的にはすべての人にとっての理由であるような（前もって存在する）理由の用語で説明されなければならない。この見解によれば、すべての人にとっての理由が存在しない限り、どの人にとっての理由も存在しない。したがって、ある人たちにとっての理由は存在するがすべての人にとっての理由は存在しないと想定することは不整合である。しかし、これは道徳哲学の歴史の大部分で理解可能で現実的であると見なされてきた可能性である。

ここで、ロニーとブラッドリーの理由の違いに対する仮言命法主義による積極的な説明が与えられる。仮言命法主義によれば、それは、次の双条件文の真理によって説明される。

Biconditional すべての命題 r 、行為者 x 、行為 a について、 x が p を対象とする欲求を持つような、ある p が存在し、かつ、 r が真であることが、 x の a することが p を促進する理由を説明するものの部分である場合 (if)、そしてその場合に限り (only if)、 r は x にとっての a するための理由である。

たとえば、パーティーでダンスがあるという事実は、なぜ、パーティーに行くことがロニーにとってのダンスしに行くための手段であり、これがロニーの欲求の対象の一つなのか、ということの説明する。したがって、**Biconditional** の if の部分から、パーティーでダンスがあるという事実がロニーにとってのそこへ行くための理由であることが帰結する。また、ブラッドリーは、次のような欲求を持たない。その欲求とは、パーティーでダンスがあるという事実が、なぜ、そこへ行くことがその欲求を促進するための彼にとっての手段なのか、ということの説明するような欲求である。だから、**Biconditional** の only if の部分から、パーティーでダンスがあるという事実が彼にとってのそこへ行くための理由ではないことが帰結する。このようにして、**Biconditional** は、ロニーとブラッドリーの理由の違いをうまく説明する。

この説明に対して、コースガードによる、SMTを前提しない、復活した排外主義の異論 (RCO : Revived Chauvinism Objection) が提起される。RCOは、理由でありうる他の候補が存在する可能性を指摘する。もし、そのような可能性を排除することができないならば、**Biconditional**は、排外主義の表現である。著者によれば、仮言命法主義の答えは次のようになる。**Biconditional**は、 R が X にとっての A するための理由であるとはどのようなことか (Reason) についての構成的な説明である。理由でありうる他の候補が存在しないことを示すためには、この構成的な説明が選言的でないことを明らかにすればよい。また、

Biconditionalが他の条件文よりも根本的であることを示すためには、Reasonが、競合する理論よりも、理由とは何かについてのよい理論を与えることを明らかにすればよい。

第4章で、規範的なものを非規範的な用語で分析する還元的な見解が擁護される。この還元とは、性質の同一性ではなく、性質の分析を提案するものである。したがって、それは、非対称的である。著者の見取り図はこうだ。規範的な性質と関係のすべては、部分的に、理由の用語で分析される。理由には、非規範的な用語（欲求、促進、説明）で、構成的な説明が与えられる。欲求は、理由の分析の中で、説明の部分として役立つ。構成的な説明は、性質の分析の中で基礎づけられる。性質は、「事物が共通に持つもの」であり、それは、構造を持つとされる。これらのすべては、認識論的な見解でもなければ、言葉の用法に関する見解でもなく、形而上学的な見解である。著者によれば、性質の構造は、事物が構造を持つ性質を持つ理由について、われわれに何かを教えるので、形而上学的な不可能性の興味深い説明を与えうる。

4. 理由過多の異論と理由過少の異論

第5章から第7章にかけて、理由過多の異論と理由過少の異論が考察される。それらの異論によれば、HTRは、外延的に正しくなく、結果として、道徳性の客観性に困難を引き起こす。

第5章は、理由過多の異論（TMR : Too Many Reasons）を扱う。TMRによれば、ヒューム主義者の基準では理由と見なされるにもかかわらず、直観的に、そのような理由は存在しないように思われる事例が存在する。著者が挙げるのは、マーガレットおばさんが、火星についてのカタログのシーンを再現するという欲求を持ち、そのためには、火星行きの宇宙船を造る必要があるという事例である。この異論をかわす一つの方法は、「欲求」と見なされるものに制限をかけることである。しかし、そのような制限をかけても、反例を完全に排除することは難しく、しかも、制限それ自体に理論的なコストがかかる。著者は、別の戦略をとって、理由は存在しないという直観の信頼性を否定する。なぜならば、われわれは、重要でない理由を存在しないと見なす傾向を持つからだ。著者の語用論的な説明は二つのステップからなる。第一のステップはこうだ。大抵の場合、われわれは実践的な目的のために理由に関心を持つ。われわれがすべきことに大いに関係する理由は重要な理由であり、あまり関係しない理由はそれほど重要でない理由である。そのとき、重要でない多くの理由は無視される。第二のステップはこうだ。われわれは、しばしば、「X にとってのAするための理由が存在する」という、理由についての単なる存在命題を作る。しかし、もし、大多数の行為がそうするための少なくとも何らかの貧しい理由を持つなら

ば、それは、ほとんど情報を提供しない。したがって、理由についての存在命題の主張が単独でなされるとき、グライスの量の公準（「求められているだけの情報を提供せよ」）から、話者が比較的重要な理由を持つという前提を強化することが予測される。というのは、話者は、もし、それが貧しい理由であるということだけを言いたければ、その理由とは何かを言うべきだからだ。この説明は、二つの予測をもたらす。第一に、そうするための貧しい理由だけが存在するような何かをするための誰かにとっての理由が存在すると言った後で、その理由とは何かを言うことによって、話者が比較的重要な理由を持つという前提の語用論的な強化を取り除き、非直観性を軽減することができる。第二に、その後で、それが特に重要な理由ではないということによって、その前提を取り消し、話者が言うことの非直観性をなくすことができる。著者の結論はこうだ。理由の過剰生産は、それ自体では、HTRにとって問題ではない。HTRは、二つの制限を満たすだけで、理由についての否定的な存在命題の直観をうまく説明することができる。その制限とは、もし、そのような理由が存在するならば、これらの理由が何かについて正しい結果を得ることができることと、それらが特に重要ではないことを許容することができることだ。仮言命法主義によれば、マーガレットおばさんの事例は、次のように分析される。マーガレットおばさんにとっての火星行きの宇宙船を造るための理由は、誰も彼女に火星行きの宇宙船を与えないことである。これは直観的に理由ではないように思われるかもしれないが、彼女にとってのそうするための理由である種類のことである。そして、もし、マーガレットおばさんの理由が特に弱い、あるいは貧しい理由であることが明らかになるならば、それが彼女にとっての理由であるということもそれほど非直観的ではなくなる。

この主張は、HTRのすべてのバージョンが受け入れると広く考えられてきた、比例主義（Proportionalism）と筆者が呼ぶテーゼを破壊する。比例主義とは、理由が欲求によって説明されるとき、理由の重みは、その欲求の強さと、その行為がその欲求をうまく促進する程度に比例して変わる、というテーゼである。HTRに比例主義を付け加えることは、次のテーゼを認めることである。行為者は、常に、すべてを考慮して、自分自身の欲求を最もうまく促進する行為をするべきだ。仮言命法主義はこのテーゼを否定する。著者によれば、比例主義は、理由が重要であるとはどのようなことかについての分析として正しくないだけでなく、外延的にさえ正しくない。著者は、より強い欲求により密接に関係する理由により重みを置くことが常に正しい理由は不明であり、マーガレットおばさんの事例は比例主義に対する反例であるように思われると主張する。

第6章は、理由過少異論（TFR : Too Few Reasons）を扱う。TFRによれば、ヒューム主義者の基準では理由と見なされない（ように思われる）にもかかわらず、直観的にそのよう

な理由が存在するように思われる事例が存在する。著者が挙げるのは、「ラリーがアンの父であるという事実が、彼が自分の娘に関心を持たない場合でさえ、ラリーにとってのアンを支えるための理由である」という事例と、「キャシーが助けを必要とするという事実が、その人がキャシーに関心を持たない場合でさえ、彼女を助けるためのすべての人にとっての理由である」という事例だ。著者は、SM（SMTは、このタイプの説明がすべての事例に適用されるという主張である）を使って、ラリーの事例は、キャシーの事例を説明するという問題に包摂されると主張する。SMによれば、ラリーの単に行為者関係的な理由は、行為者中立的な理由に由来する。その行為者中立的な理由とは、自分の子供が良い生活を送るように最善を尽くすための理由である。ラリーの単に行為者関係的な理由は、彼の欲求に依存しない。なぜならば、それは、すべての行為者中立的な理由と同様に、彼らの欲求が何であれ、すべての人にとっての理由であるこの行為者中立的な理由に由来するからだ。アンがラリーの娘であるという事実は、アンを支えることがラリーにとっての彼の子供が良い生活を送るように最善を尽くすための手段である理由の説明を完全にするために必要である。したがって、それは、アンを支えることがラリーの欲求の一つの対象を促進する理由の説明を完全にするためにまた必要である。したがって、もし、仮言命法主義が自分の子供が良い生活を送るように最善を尽くすための行為者中立的な理由を何とかして説明するならば、それはまたラリーの理由を扱うこともできる。この説明は、ラリーのようなケースを、キャシーを助けるための理由のような行為者中立的な理由を説明するという問題にうまく包摂する。

ここで、著者は、仮言命法主義がキャシーの事例を扱う仕方を理解するために、いくつかの異なる特徴を識別することが重要であると主張する。第一に、帰属についての行為者中立性である。これは、それが誰にとっての理由なのかを言うことなく、「キャシーが助けを必要とするという事実は、彼女を助けるための理由である」と言うことは意味をなすということだ。第二に、理由の普遍性である。これは、この主張が、彼女を助けるためのすべての人にとっての理由であることを含意するように思われるということだ。第三に、理由の弱い様相的地位である。これは、キャシーを助けるための理由の普遍性は、たとえば、周囲の人々がキャシーの福利にたまたま価値を認めるという事実のような、偶然的な事実に基づかないように思われるということだ。第四に、理由の強い様相的地位である。すべての欲求について、ある人がその欲求を持たない場合でさえ、その人は、キャシーを助けるための理由を持つように思われるということだ。著者は、HTRが、キャシーの事例で行為者中立性を十分に説明するために、この四つの特徴と、行為者中立的な理由がすべての人にとって同じ重みを持つ仕方を説明する必要があると主張する。

著者によれば、HTRにとって、帰属についての行為者中立性と理由の普遍性を説明することは容易である。Agent-Neutralの定義から、行為者中立的な理由を帰属するとき、もし、ある文脈で、「われわれ」の範囲がすべての人を含むならば、理由は普遍的でなければならない。そして、もし、「われわれ」の範囲が（そこにいる）すべての人を含むならば、その理由は弱い様相的地位を持たなければならない。しかし、強い様相的地位を説明することは、それほど簡単ではない。著者は、まず、理由が強い様相的地位を持つことが、HTRと矛盾しないことを指摘する。なぜならば、HTRは、ある人の理由はその人の欲求に依存すると主張しないからだ。HTRが主張することは、誰かが理由を持つたびに、その人はその理由を説明する何らかの欲求を持たなければならないということにすぎない。HTRは、どのような理由についても、その理由を持つ各人がそれを持つ理由を説明する単一の欲求が存在しなければならないと主張しない。HTRが主張することは、ある理由を持つ各人は、異なる欲求のおかげでそれを持つということだけだ。仮言命法主義は、この特徴を明確にする。仮言命法主義によれば、R が X にとっての A するための理由であることは、X が、彼女の A することが促進する対象を持つような、何らかの欲求を持つことを必要とする。もし、ある行為が、二つ以上の欲求の対象を促進することができるならば、同じ理由が、二つ以上の欲求によって説明されうる。このことは、すべての理由が欲求によって説明されることの反例ではない。HTRは、理由の過剰決定を許容する。著者の提案は、このことを、本当に行為者中立的な理由が存在しうる仕方を説明するために使うというものだ。すなわち、本当に行為者中立的な理由は、大幅に過剰決定されており、単に、すべての（あるいは、ほぼすべての）可能な欲求によって説明されうることによって、各人が欲求するものが何であれ、各人にとっての理由である。もし、このような理由が存在するならば、それは、すべての可能な欲求によって説明されうる。したがって、何らかの欲求を持つ人は誰であれ、この欲求を持つ。そして、もし、行為者と見なされるために、少なくとも何らかの欲求を持つ必要があるならば、すべての可能な行為者は、この理由を持つ。このとき、もし、あなたがその欲求を持たないならば、それがあなたにとっての理由ではない、そのような欲求は存在しない。したがって、そのような理由は普遍的であり、強い様相的地位と弱い様相的地位の両方を持つ。

ここで、著者は、促進関係 (promote-relation) の考察に移る。著者は、「あなたがAすることを欲求する場合にのみ、あなたにとっての A するための理由が存在する」という見解と、「欲求の対象に対する必要な手段である場合にのみ、行為は欲求を促進する」という見解を退け、次の見解を採用する。「X の A することが何らかの基準値と比較して p の可能性を増加させる場合にのみ、X の A することが p を促進する。そして、この基準値

は、X が何もしないという——現状維持の条件の下での p の可能性によって固定される」。これは、著者自身が挙げるさまざまな事例を考慮に入れるための十分に弱い見解であり、過剰決定の仮説と両立しうる。

結局のところ、仮言命法主義による行為者中立的な理由の説明は、次のようなものになる。すべての可能な欲求を促進するような、ある行為が存在する。したがって、これらの行為を遂行するための理由は、行為者自身が何を欲求するにせよ、すべての人にとっての理由である。しかし、それにもかかわらず、それらは欲求によって説明される。そして、このことは、行為者中立的な理由の強い様相的地位と弱い様相的地位を説明する。ここで、著者は、どのような行為が存在すると信じるかによって三つの見解を分ける。「カント主義者」は、すべての可能な行為者の何らかの欲求の対象を促進する行為が存在すると信じる。「アリストテレス主義者」は、すべての可能な人間の行為者の何らかの欲求を促進する行為が存在すると信じる。「ヒューム主義者」は、われわれの何らかの欲求の対象を促進する行為が存在すると信じる。

5. 理由の重み

第7章で、著者による理由の重みについての説明が与えられる。著者によれば、厳密に言うところ、重みを持つのは、理由ではなく、理由の集合だけであり、しかも、同じ行為者にとっての同じことをするための理由の集合だけである。著者は、形式的に、順序つき三つ組み $\langle R, X, A \rangle$ によって、理由を表現する。ただし、 R は理由であり、 X は行為者であり、 A は行為のタイプである。もし、 R が X にとっての A するための理由であるならば、 $\langle R, X, A \rangle$ は適切である。そして、 S は適切な順序つき三つ組みのすべての集合である。したがって、 S はすべての理由の集合を表現する。 S^s は、 S の「加算可能な」部分集合である。 S^s の元は、 x と a に関して変化しない S の部分集合である。そして、 S^s と S^s の直積上の関係 $>$ を定義する。それは、「…は…よりも重要である」という関係を表現し、非反射的で、反対称的で、推移的である。この関係に対して、著者は次のような分析を与える。ただし、 $S_{X,A}$ は、 X にとっての A するためのすべての理由の集合であり、 $S_{X,\sim A}$ は、 X にとっての A しないためのすべての理由の集合である。 S_A は、 A するためのすべての正しい種類の理由の集合であり、 $S_{\sim A}$ は、 A しないためのすべての正しい種類の理由の集合である。

Ought X が A すべき場合は、 $S_{X,A} > S_{X,\sim A}$ の場合である。

Correct A することが正しいのは、 $S_A > S_{\sim A}$ の場合である。

Right Kind of Reasons A するための正しい種類の理由は、彼らが A することに従事するという事実が、なぜ、彼らにとっての理由が存在するのかを説明するために十分であるような、A するという行為に従事するすべての人によって共有される理由である。

Weight Base 理由の集合 A が理由の集合 B よりも重要である一つの仕方は、集合 B が空であり、集合 A が空でないことである。

Weight Recursion 理由の集合 A が理由の集合 B よりも重要である別の仕方は、A に重みを置くためのすべての（正しい種類の）理由の集合が、B に重みを置くためのすべての（正しい種類の）理由の集合よりも、重要であることだ。

著者によれば、これらの分析によって、行為者中立的な理由の重みについてさらに説明を与えることができる。詳細は省くが、結論だけ述べると次のようになる。行為者中立的な理由により大きな重みを置くための理由は行為者中立的な理由であり、したがって、理由の重みに関連する。それに対して、行為者中立的な理由により小さな重みを置くための理由は行為者に特異的な理由であり、理由の重みに関連しない。したがって、**Weight Base** によって、行為者中立的な理由は比較的重要な理由であることが帰結する。

6. 欲求の説明と道徳認識論

第8章で、著者による欲求の説明が与えられる。著者によれば、欲求は、(1) 動機づけに有効であり、(2) あなたが（単に原因によって引き起こされたのではなく）理由によって行為したと見なされるようにする能力を持つ。そして、それは、理由の背景条件の部分であり、行為者は、行為者自身にとっての理由であるための十分条件が満たされたことを知ることなしに、その理由によって行為することができることとされる。著者は、欲求を理由の用語で分析するクインとスキャンロンの見解を退け、理由を欲求の用語で分析することを提案する。そして、欲求の対象に無関係な事実を欠く「方向づけられた注意」に着目し、仮言命法主義による欲求の分析として、次のものを提案する。

Desire X がその対象を P とする欲求を持つことは、X が次の傾向に基礎を持つ心理状態にあることである。ある行為 a と、X によって信じられている、ある命題 r について、もし、X の信念 r が、なぜ、X の a することが P を促進するのかを説明することに明らかに役立つならば、X は r が顕著であることを見出し、このことは、X に a するよう

に促す傾向があり、X の注意は、r のような考慮に対して方向づけられる。

著者によれば、このように特徴づけられた欲求は、事物を理由と見なすことを含む。しかし、欲求の分析の中で理由に訴える必要はない。

第9章で、道徳的な動機づけと道徳認識論の問題が考察される。著者は、まず、理由についての内在主義者の見解を取り上げる。内在主義者の主張によれば、理由と動機づけの間に何らかの必然的な関係が存在する。著者は、内在主義に対する反例として、理由の存在と動機づけが両立しないように思われる事例を二つ挙げた後で、道徳的な動機づけの考察に移る。著者によれば、内在主義者は行為者が不合理である場合にのみ道徳的な理由によって動機づけられることに失敗すると主張するが、それは疑わしい。著者は、次に、外在主義者の見解を取り上げる。外在主義者の主張によれば、理由と動機づけの間に直接的な結合は存在しない。著者は、この見解は何か重要なことを見落としていると主張する。著者によれば、ある点で内在主義者は正しい。その点とは、ある基本的なレベルでは理由はそれにしたがって行為するためのものであるということだ。理由によって行為する能力のない者は行為者ではない。仮言命法主義は、理由と動機づけの間に重要で密接な結合が存在すると考える。というのは、仮言命法主義は、すべての理由が何らかの欲求に結びつくと考えるからであり、その欲求は傾向的に動機づける状態であり、理由によって行為すると見なされるような動機づけであると考えからである。仮言命法主義は、これらの傾向が実現されることに失敗しうるような多くの仕方が存在すると認めることができる。一つは、行為者が情報を欠いている、あるいは偽である信念を持っている場合であり、もう一つは、理由が行為者の心理とは懸け離れている場合である。ここで、著者は、理想的な場合として「有徳な人」を取り上げる。有徳な人とは、正しいことを欲求するだけでなく、それらを互いに調和させ、適度に欲求する人である。そのような人は、理由の重みに対応する強さの欲求を持ち、道徳的な理由によって行為するのに適しているだけでなく、道徳的な問題に関する、よい判断者でもあるとされる。

第10章で、HTRは反対すべき種類の道具主義になるという批判が取り上げられる。著者は、その論点を六つにまとめる。

- 1 どのような欲求を持つべきかについて熟慮することは不可能である。
- 2 (内的な) 欲求を持つことに賛成する、あるいは反対する理由は存在しない。
- 3 少なくとも、合理的批判のスコープを超えた、いくつかの欲求が存在する。
- 4 すべての行為者は、少なくとも、彼女が持つための理由を持たない一つの欲求を持た

なければならない。

5 あなたは、熟慮の結果として、あなたのすべての現在の欲求に到達することができなかった。

6 あなたは、もし、どのような欲求も持たないならば、行為するためのどのような理由も持つことができない。

議論の詳細は省くが、著者の結論は、HTRはせいぜい 6 にコミットするという意味で「道具主義的」であるにすぎないというものだ。評者の考えでは、その議論の中で重要な点は次のことである。第一に、HTRは、行為者がある対象にそれ自体のために関心を持つことを認めることができる。第二に、何の理由にもよらずにある対象に関心を持ち始めたとしても、今ある理由によってそれを信じていないということは帰結しない。第三に、理由によって持つのではない欲求はありうるが、そのことは、その欲求が合理的に批判されることができないということの意味しない。第四に、理由は何を欲求すべきかについて推論することの中でさえそれ自体が欲求によって説明されるが、欲求はその理由の部分としては現れない。

7. おわりに

本書は、「ヒューム主義者」の理論に対する異論を詳細に分析し、その背景にある考え方も明らかにしている。著者の最終的な結論に賛成するにせよ、反対するにせよ、哲学にとって重要な帰結を持ちうる「行為の理由」について考えようとする者にとって、本書の議論を参照することは、非常に有益であると思われる。

[京都大学大学院修士課程・哲学]